

### 甲府商店街対策 有識者提言



伊藤座長

補助金を消化するだけのイベントの見直しや旧銀座ビル更地化、ココリの空きテナント解消を、甲府市のまちづくりの方向性を産学官で検討する「甲府タウンレビューチーム」(座長・伊藤洋東立大学長)はこのほど商店街対策の中間報告を市などに提出した。これを受け、市や甲府商工会議所などは16日、再生に向けた協議をスタートさせた。長年の懸案だった空洞化に歯止めが掛かるのかどうか。



## 伊藤座長 「文化都市への転換を」

### 旧銀座ビル、ココリ 再生阻害

中間報告では行政側に厳しい指摘が盛り込まれた。これまで商店街対策の「常道」だった空き店舗対策とイベント支援は商店街関係者の大きなやる気につながらず「一過性に終わっている」とした。このため、商店街や甲府商工会議所が申請

活用めどがたっていない旧銀座ビル

旧銀座ビルは大型集客施設として1974年以降、ダイエーやオギノなど降、タイエーやオギノなどのスーパ―や甲府市の市民交流施設も入居したが、2009年に撤退。その後、所有者の税金滞納に伴い、東京国税局が差し押さえ、競売にかけられたが不調に終わるなど活用の見通しが



空きテナントが目立つ再開発ビル「ココリ」

「このまま放置されていることは関係者の努力に対して立っていない『負の遺産』。大きな影響を与えかねない」と打開策の必要性を強調している。ココリには売却した分譲マンションや立石美術専門学校も入居しているが、商業施設の相次ぐ撤退は積物の整備だけでは活性化が難しいことを浮き彫りにした。甲府中心街の地盤沈下の進展は郊外型の大型ショッピングセンター(SC)の進出ラッシュにある。最近



でもイオンモール甲府昭和の増床計画をめぐり、同市商店街などが反発を強めている。

打開策はあるのか。伊藤座長は「物を買うのはネットでも簡単に来る時代。(SとC)物を買うことで競争するという都市機能を考え直したらどうか。甲府にはかつて小江戸と呼ばれた歴史や文化の蓄積がある。Sはにぎわいをつくり擬似的都市空間を演出している

に過ぎないが、中心街は飲食店など人の営みがある。例えばCは売れないが音楽を表現する場や食べる楽しみ、刺激を受ける場など新しい発想で新しいビジネスを考える。つまり販売・消費から文化都市へと価値を転換し、生き残る仕組みをつくる必要がある。今回が中心街再生の最後の機会。リスクを覚悟で行政や商店街が取り組まなければならぬ」と指摘している。